

第12回 『無名草子』

次の文章は『無名草子』の一節で、八十三歳の老尼が最勝光院(京都東山南禅寺あたりにあった寺院)に参詣した折、近くの邸に宿って、その家の女房があれこれ語り合うのを聞いているという場面である。これを読み、後の問いに答えよ。

□ 注 一部読み果てて、「滅罪生善」など数珠押しすりて、「今は休み侍りなむ」とて寄り臥しぬれど、この人々はそ

ぞろごとども言ひ、経のよき悪しきなどほめそしり、花・紅葉・月・雪につけても、心々とりどりに言ひ合へる

も、いとをかしければ、つくづくと聞き臥したるに、三四人はなほ居つつ、物語をしめじめとうちしつつ、「さて

もさても、何事か、この世にとりて第一に捨てがたきふしある。おのおの、心におぼされむことのたまへ」と言

ふ人あるに、「花・紅葉をもてあそび、月・雪に戯るるにつけても、この世は捨てがたきものなり。情けなきをも

あるをも嫌はず、心なきをも数ならぬをも分かぬは、かやうの道ばかりにこそ侍らめ。それにとりて、夕月夜ほ

のかなるより有明けの心細き、折も嫌はず所も分かぬものは、Xばかりこそ侍らめ。夏も、まして秋冬など、

月明かき夜は、そぞろなる心も澄み、情けなき姿も忘れ、知らぬ昔・今・行く先も、まだ見ぬ高麗・唐土も、

残る所なく遙かに思ひやらるることは、ただこの月に向ひてのみこそあれ。されば、王子猷は戴安道を尋ね、簫

史が妻の、月に心を澄まして雲に入りけむも、ことわりとぞおぼえ侍る。この世にも、月に心を深く染めたる例、

昔も今も多く侍るめり。勢至菩薩にてさへおはしますなれば、暗きより暗きに迷はむるべまでも、とこそ、頼

みをかけ奉るべき身にて侍れ」と言ふ人あり。また、「かばかり濁り多かる末の世まで、いかでかかる光のとどま

りけむと、昔の契りもかたじけなく思ひ知らるることは、この月の光ばかりこそ侍るを、同じ心なる友なくてた

だひとり眺むるは、いみじき月の光もいとすさまじく、見るにつけても恋しきこと多かるこそ、いとわびしけれ」。

語句

- すずろぐと「漫ろ言」(名)：とりとめのないこと。くだらないこと。
- とりどりなり(形動)：いろいろ。それぞれに特徴のあるさま。
- サーも自然サーも接：ところどころ。サー。それにしても。
- ふし「節」(名)：①(本文中では箇所)点。また根拠、理由。
- ②おり、機会。ま、かけ。③歌の調子の高低。(歌のこくぎり、こころなし「心無し」)(形)①道理を解さない。思慮や分別がない。
- ②人情を解さない。③情趣を解さない。風流心がない。
- かすならず「数ならず」(連語)：ものの数ではない。取るに足りない。
- そぞろなり「漫ろなり」(形動)：(本文中では)心が落ち着かない。
- しるべ「導き・知る切」(名)：①導き。案内すること。また、その人。
- ②知り合い。ゆかりのある人。